

# 第3期札幌文化芸術円卓会議各委員から提出されたテーマ・進め方・意見等(一部要約)

	北村委員長	南副委員長	石川委員	尾崎委員	清水委員	鈴木委員	富田委員	山田委員	伊委員
テーマ	<p>○第1期の提言に対して「芸術の産業化」から「産業の芸術化」へ ・経済効率によりアート活動が制限されてはならない ・経済活動や日常生活に生かされるアート ・アートの担い手を固定的に考えない。市民の全てがアーティスト(アート・ディレクター、マネジャー、コンシエール、コミュニケーター、ボランティア、サポーター…) ・ただし、アートが全くの手段となってはならない</p> <p>○第2期の提言に対して「アートセンター」準備室の開設について(中心と周辺におけるアート情報の共有化) ・「アーツカウンシル」の運用開始について(理念的構想から現実的提言までの課題整理、トップアーティストの養成からアマチュアの活動支援までの体制作り)</p>	<p>①第1期・第2期のメッセージの具体的検証 ②「人のつながり」を作っていく「情報流通」の具体的構築(人を中心に考える情報構築) ③都市のアート空間の創造 [日常的な]都市空間でのアート(おしゃれで快適なゆとりを楽しめる空間)[非日常的な]都市空間でのアート(音楽祭や芸術祭といった非日常的な『お祭り』を刺激的に活性化させ、都市全体をマッサージュさせる) ○総じて言えば、第1期・第2期を実行可能で有効にする提案にする。</p>	<p>○第1期・第2期の内容を踏まえ、実践的で具体的な提案ができればよい。 ○具体案としては、「札幌の文化芸術インターネットメディア(ウェブサイト)を市が中心につくること。これは、創造都市札幌、文化芸術のまちを目指す札幌の広報と同時に市民に頼られる(相談・活用できる)「インターネットメディア」という形の「アートセンター」を目指すもの。 ○市の他の文化芸術事業の情報も集約し発信します。このサイトを軸にfacebookやtwitterなどのSNSサービス等を活用しながら発信するとよい。インターネットを中心に市民が集まるイベントも開催したい。このインターネットメディアには、どういった目的・役割・コンテンツが必要かを話し合いたい。</p>	<p>○札幌市の文化・芸術・行政は一つ一つの事業によってミッションが異なるため、一つのテーマに括るとするのは少し乱暴に思う。 ○資料としてまとめやすいのは理解できるが、「テーマ」のために議論することが、この会議では大切だと思えない。</p>	<p>○情報(発信・共有・蓄積・利用促進)のやり方について再検討(より効果の高い方法・手法・システム=担い手とメディア) ○アートセンター検討から実働へ段階が変化⇒メディアも注目する情報発信のチャンスの時機 ○前回・前々回の会議であまり議論されていない点である ○「共創」が必要という視点から、たとえばウィキペディアのように一般市民が編集できるデータベース構築やキャンペーンソングコンペなど具体案を提案</p>	<p>○市民・行政・アーティストをつなぐキーワード「芸術の産業化」の見直し ⇒それぞれの考える産業化があり、考えの違いによっては、この関係が円滑に回らない可能性があるのでは。どのようなキーワードに設定すれば、芸術が道具にならず、市民がアーティストとより良い関係を築くことができるのか考えたい。 ○行政が、市民(企業)とアーティストにどのようにつながりを持たせるのか。⇒イメージがつかめないため。</p>	<p>○第1期は俯瞰図が示され、第2期には「共創」の概念が示されました。市民が創造性を発揮するための仕組み作りが急務です。第3期では、「産業化」の推進が示されています。 ○多極化し、変化の激しい世界のアートシーンや市場を視野に置いたネットワーキングを前提とした、質の高い情報を市民に届けるため、「収集・編集・発信」を担う人材をどう発掘し育成するかを議論したい。</p>	<p>○アーティスト情報のさらなる充実 ・市民が活発な芸術活動を行うために、サポートしてほしい(くれり)アーティストにはどんな人材がいるか。 ・「札幌市アーティストバンク」の充実 ○壮大な計画で終わるのではなく、こつこつと実現可能な案を積み重ね、それに必要な人材確保及び発掘をしていけばよい。 ○文化芸術を浸透させるには、専門家や興味がある人たちだけで論じていても仕方がないと感じる。どのように市民を巻き込むかといった部分も考えながら話をすすめればよいと思う。</p>	
今後の進め方	<p>特になし。</p>	<p>①について前回の話し合いから、ピックアップすると、鈴木委員:能力あってもチケットノルマをさばけず役がもらえない札幌のオペラ事情 山田委員:昔ながらの手売りへの依存⇒考証:小規模市町村の場合、市民大半が知人なので問題ないが、190万都市では大半が他人。そのため、3%の潜在客層の5万人に手が届かない。さらに、人間の感覚は昔と変わらず、顔見知りにならないと応援する気分になれない。 ⇒解決の可能性:石川委員:「流通の構築」の必要性に可能性を見い出せないか。より具体的には、富田委員:「たくさん人の人の繋がり」の形成 ②のテーマになることでもある。現代社会は大量の情報が過剰に発信されている。そのため、かえって個々の情報が見えなくなっている。それらの打開方法を見い出していく必要が出てくる。 石川委員:「行政の横断的流通」、「ボランティアの動的組織」も検討範囲 これらは③の具体的実行において行政組織の横断的協力も必要になるため、これらを具体例を通して検証していく。「日常的」という環境美化の問題と「非日常的」という都市としての『お祭り』の持つ発信力の強化をまずは区分していく</p>	<p>○委員から集まったテーマを検討し、 ①テーマを決定。 ②テーマをどのように展開し、結論を出すかスケジュールを決める ③テーマに沿った会議を開始する。</p>	<p>○初回だったので必要だとは思いますが、資料を読めばわかる事務局説明は最小限にし、なるべく委員内での議論に時間を使えるといい。 ○文化部の職員も市民であることには変わりないので、一緒に議論ができるといい。</p>	<p>○総花的という批判を避けるため、「まんべんなく」「バラマキ型」の計画とならないよう、「一点集中」「的を絞った」議論を目指す。 ○「底上げ」よりも、「上から引っ張る」施策を。町内会レベルの支援より、アーティストの卵や支援する市民があこがれや夢を抱き、これからの期待・希望を持てるような、対外的アピールもできるような施策を目指す。</p>	<p>○北村委員長を中心に進める。 ○各回で委員一人が何かのテーマを調べ、それを発表し、その内容をに沿って委員で話し合いを進めると、内容が濃くなると思われる。</p>	<p>○特になし</p>	<p>各委員からあがったテーマ候補の中から絞り、その項目を協議し、実現に向けてまとめていく。 ○言葉だけを並べて終わるのではなく、現実的にできることを決め、それについて今度は行政から答えを頂きながら修正していく必要があると思う。</p>	

	北村委員長	南副委員長	石川委員	尾崎委員	清水委員	鈴木委員	富田委員	山田委員	尹委員
その他「意見	○特になし	○まずは、幅広く発言し、そこに出る問題や提案を検証していけばよい。  ○第2期の(アーツ)センターという思考と逆から攻めるのもよいのではないか。	○特になし	○会議で一つの結論を出し、資料にまとめるのは大事なことだとは思いますが、まとめることが会議の目的ではないので、多少散らかっても現状の問題をあぶり出し、解決へのアプローチを探ることが大切だと思う。  ○円卓会議は公開なので、日時の発表は少しでも早く行うべき。今までのタイミングでは遅い。	○今後は紙媒体による提出のほか、メールや掲示板など、電子媒体を導入した方が、委員も事務局も便利だと思う。	○特になし	○現在まで全てを加算する議論がなされているが、総花的なものになりがち。  ○未来を見据え、どこに優先順位があるのか、ある程度の絞り込みや具体性も必要ではないか。	○文化芸術基本計画等とは別個にテーマを絞り込むことは難しいと思う。	○特になし